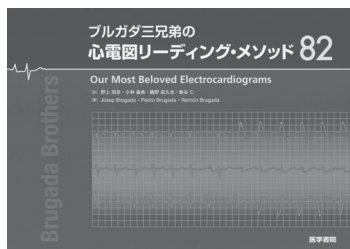


〔評者〕
三田村秀雄
東京都済生会中央病院・
心臓病臨床研究センター長



ブルガダ三兄弟の 心電図リーディング・ メソッド 82

野上昭彦, 他 訳
Brugada J, Brugada P,
Brugada R 著

B5判横 頁232 2012年
定価 4,725 円(本体 4,500 円+税 5%)
[ISBN978-4-260-01544-8]医学書院刊

“The Kiss of the Girl from Ipanema.”

これが何の事かを知るだけでも一読の価値がある。

心電図の解説書が次から次へと出てくるが、どれを読んでも本当に読めるようにはならない、多くの読者がそう嘆いているに違いない。確かに心電図は深い。特に不整脈の読みは基礎的な電気生理学的法則を理解したうえで、後は幾何学の問題をパズルのように解いていく頭の体操みたいなものである。心電図の診断基準を羅列しただけの本を読んだだけでは、読めるようになった気がしないし、実践にも役立たない。心電図は読む人の「好奇心」と「ねちっこさ」がなければ、猫に小判でしかない。でもそのきっかけとなる興味をかき立ててくれる導火線の役割を担うのが本書である。

できる人はその推理の進め方にセンスと冴えがある。名だたる不整脈学の権威は皆、心電図が好きで、皆、それを読みこなす才能を兼ね備えている。あたかも先天性のように、いや、もしかしたら本当に先天性なのかもしれない。そう思わせるのも本書の執筆者が、あのブルガダ三兄弟だからにほかならない。

Pedro, Josep, Ramon の三兄弟はスペイン生まれで、バルセロナの大学卒業後にこの道に入ることになる。その後、各人が世界を股にかけて活躍中である。後にブルガダ症候群と名付けられた最初の症例報告は1992年、Pedro と Josep が発表し、Ramon は1998年、在米中に Nature に発表された特発性心室細動の分子生物学的研究で有名になった。ちなみにブルガダ症候群という名前は1996年に JACC に掲載されたわれわれの論文で初めて使用したものであるが、白状すると、ブルガダ症候群と名付けてしまえば査読者のブルガダ某がきっと採用してくれるだろうと読んだゴマすりがかきかけである。

さて本書の内容であるが、三兄弟が長年かかって大事に集めた愛すべきケースが全部で82個、取り上げら

れている。いずれも珠玉の心電図ともいえるようなものばかりである。個人的には心房梗塞の心電図について見とれてしまった。それぞれ代表的な記録がまず、右側ページに示され、そこには最初に掲げたような奇抜なタイトルが付いている。それだけで、読者はそこに何が秘められているのか、探索せざるを得ない気持ちになってくる。一例ごとに工夫を凝らしたタイトルが付けられており、それが何の意味なのか、深読みするのもまた楽しいが、訳者の野上昭彦、小林義典、鶴野起久也、蜂谷仁の各先生にとっては心電図の解説よりもこの翻訳が難しかったに違いない。

面白いのはそれぞれの心電図にゆかりのある人達の名前があげられており、その人達にささげる、という形式を取っていることである。なぜこの人にささげるのか、と変なことを考えるのもまた一興である。ブルガダ波形の心電図は Charles Antzelevitch にささげられていた。この心電図は当然ながら「Our most precious jewel」として提示されているが、なぜかこれが一番、平凡な心電図に見えてしまったのは私だけであろうか。Michael Haissaguerre にささげられたのは「Concepts are changing」と題された心電図で、これなんか P on T で始まらない肺静脈起源の心房期外収縮が紹介されていて面白かった。

とにかく楽しみながら、深みにはまっていくのが本書である。ブルガダ三兄弟がこんな部分に興味を持ったのだ、と知るだけでも面白い。多分、翻訳者達も苦勞しながら、でも存分に楽しんだに違いない。今度は読者が楽しむ番である。

そういえば、「Super-wolff」、これもこの本に教えてもらったすてきなサインである。「イパネマの娘のキス」も多分、一生忘れないだろう。何なのかは本書を読んだからのお楽しみ。